

2020年7月29日

アーティスト・プロジェクト#2.05 スクリプカリウ落合安奈インタビュー

「アーティスト・プロジェクト#2.0」は、これまでの MOMAS コレクションや企画展の枠を超え、現在活躍しているアーティストを自由に紹介する展示プログラムです。

2020年度は、美術家のスクリプカリウ落合安奈さんを迎え、「アーティスト・プロジェクト#2.05」を開催します。

スクリプカリウ落合安奈さんに今回のテーマや取り組みなどを伺いました。[聞き手：五味良子（埼玉県立近代美術館学芸員）]

Q1) 今回のアーティスト・プロジェクトでは、どのようなテーマを掲げていますか？

“2つの祖国に根を下ろす” 試みから生まれた「土地と人の結びつき」というテーマを発展させて、人々の中に眠る帰属意識の概念について考えています。今回展示の1つ《骨を、うめる》では、ベトナム中央部の歴史ある港町・ホイアンを舞台に、近郊にある江戸時代の日本の商人・谷弥次郎兵衛（たに やじろべえ）氏を中心に3名のお墓を取材しました。合計1か月少々のリサーチの中で谷氏のお墓を訪ねたとき、喧騒に満ちた旧市街を出て墓所にいたる道を歩むと、お墓の周りが虫・魚・鳥などのホイアンのたくさんの生命に包まれていることにまず心を打たれました。実はお墓は北東10°—ホイアンから見た日本の方角—を向いて建てられています。お墓を背に、さらに北東10°の方向に歩みを進め、最後に視界に現れたのが海でした。ここに吹く風が、日本とホイアンを結んだことを実感しました。

リサーチの成果を世界遺産に登録されているホイアン旧市街で、インスタレーションとして発表をしたときは、北東を向いた窓の上で本物の風に揺れるカーテンに、あの時眼前に広がった海の映像を投影しました。帰国後、墓をどこに向けて建てるのかということや、海を越える人の移動を可能にした船のことに思いを巡らせているうちに、更に強く方角というものを意識しました。そして、太陽や月の軌道から方角を示す渾天儀（こんてんぎ）に着想を得たオブジェもインスタレーションに取り入れました。コンパスのように

直接的でないことによる意味の広がり重要だと考えています。言い伝えによると谷氏は、日本の鎖国政策によりベトナムのフィアンセとの仲を引き裂かれたものの、もう一度フィアンセに会うためにホイアンへ戻り、その地で没したといえます。このことから、国策や、時に人々を隔てる国という境界を越えていく個人の想いについて考えさせられています。この谷氏のエピソードに象徴される、“鎖国と国際結婚”から見えてくる隔たりを生むものと、逆にそれを越えてゆくものが、現時点で到達したテーマです。墓が人生の終わりを示す反面、結婚や誕生は生の側面を照らし出し、作品にコントラストを生み出していると思います。

また、帰国後も調査を継続する中で、彼に関して様々な描かれ方があることに気づきました。それぞれの違いが意味することも含め、現在展覧会に向けてリサーチを進めています。

Q2) 今回の展覧会へ向けた、新たな取り組みやリサーチの様子などを教えてください。

墓石によると谷氏は長崎の平戸出身で、平戸の港からベトナムへ旅立っていったと考えられます。彼が命を閉じた土地だけでなく、命が始まった土地も見てみたい、そういう思いで長崎でのリサーチに基づく新作を予定しています。ただ、あらかじめ結論を予測して形を考えてもその通りにいかないことがほとんどなので、実際に長崎を訪ねてみて、そこで何が見つかるか…関係機関や研究者の協力を得て、現在リサーチを進めている段階です。平戸には、谷氏の他にも鎖国に翻弄された国際結婚をした人物にまつわる記録があるという情報を得たので、現地での発見を丁寧に持ち帰りたいと思います。また、ホイアンで存在を知ったもう1人の御朱印船貿易商の荒木宗太郎氏と、その妻となり長崎で永眠したベトナムの王女にも注目しています。当時の輿入れの様子は、現在も長崎の祭り「長崎くんち」の中で再現され、語り継がれています。

今回生まれ育った埼玉で展示することとなり、これまで作品を作る上ではあまり意識することのなかった「県」という単位の自分自身の足元を考える機会になりました。これまで、日本とルーマニアという大きい単位での自身のコミュニティーに対しては、土着の祭りや風習のフィールドワークを通して土地の哲学を紐解いてきました。しかし、今回埼玉県という単位に絞って改めて深く考えたことで、更に今まで取り組んできたことの解像度が上がっ

た感覚があります。これまでの各地でのリサーチを通じて、自分のコミュニティーの文化の客観視が異文化理解の第一歩ではないかと感じていたので、自分自身もコミュニティーの単位によってはその意識が弱かったという発見と、実際やってみてどう意識が変わっていくのかという変化について考察しています。

60年前、私の母方の祖父母が結婚を機に、公団が売り出した土地の抽選に当たって埼玉県内に引っ越してきたのが、埼玉に根を下ろすきっかけでした。自分の来し方を照らし合わせると、人の移動や結婚という生の節目、ルーツ、ローカルな儀礼といった作品のテーマにもつながります。

今年は新型コロナウイルス（COVID-19）の影響であちこちのお祭りが中止になっていたりしていますが、神事だけ行われているケースもあり、改めて土地にとっての祭りや風習とはどのような意味を持つのかを再考しています。今はなかなか厳しい状況ですが、可能な範囲で埼玉の祭事取材しています。今回出品する《Blessing beyond the borders》では、日本とルーマニアの土着の祭りや風習が映し出す景色を二重螺旋の構造を用いて視覚的に重ね合わせ、また聴覚的にはその土地でレコーディングした音を編んできた中に、埼玉県でレコーディングした土地の音を組み込んで、空間に響かせる予定です。

Q3) 昨年の nap gallery での展示 (2020.11.30-12.15) は、「骨を、うめる」というタイトルが示す通り谷氏の後半生を辿った第1部、今回の展示が遡って前半生を追う第2部、つまり「骨が、うまれた」土地を訪ねることとなるわけですね。もし谷氏のように、最期に眠る土地を選べるのだとしたら、落合さんは今はどこに骨を埋めたいですか？

現時点では日本とルーマニアの両方ですね。この質問に対する答えは、人生の流れの中で変わっていきそうです。

Q4) アーティストとしてキャリアを重ねる上で、影響を受けた人やできごとはありますか？

人に関しては、様々な人から色々な形で影響を受けていると思うので選ぶのが難しいです。できごととしては、大学の学部生だったある時期、自分が抱える問題意識が社会課題として周囲と共有できないもどかしさから、より多

くの人に伝わりやすい形を目指して作品の抽象化が進みました。身体と精神の関係を問うような、どちらかというところ影や生きた心地のしない浮遊感を感じる作品が増えました。しかしそのまま人に受け入れられないことに怯えて本当に向き合うべきものを避け続けることで、作品を生み出せなくなると感じ、誰に何を言われても自分自身にとって重要な意味を持つルーマニアという国にしっかり向き合わなくてはならないという思いが強くなりました。そして実際に 10 数年ぶりに、ルーマニアの地を踏みました。日本かルーマニアか、どちらに根を下ろすのかという、二者択一の強迫観念にとらわれるのではなく、どちらも自分の一部であると受け止められるようになり、スクリプカリウの名前と共に生きていくことを決心しました。以後は数年おきに訪れるようになり、今にいたります。

また、大学院生の時、フランスの美術学校エコール・デ・ボザールの学生とのプロジェクトで、彼らに日本の町を紹介して歩くという機会がありました。その中で、寺と神社の違いについて問われた時に明確な説明ができない自分に驚きました。そして、知っているつもりで実は知らないことがたくさんある日本という土地の持つ文化についてもっと知りたいという気持ちが芽生えました。

この 2 つが、現在の活動のベースとなる、各地の祭りや風習から「土地と人の結びつき」について考えることや、感覚的な話ですが生の喜びに意識の向きが大きく変わったできごとです。

それから影響の大きかったできごととしては、20 代の半ばで石橋財団の支援により複数の国へ 2 か月間 1 人でリサーチに渡ったことがあります。これが海外でのリサーチベースの制作の始まりでした。トルコ、ポーランド、イギリス、ドイツを訪れたのですが、それぞれの土地で得難い出会いがありました。東西の文化が混ざり合うトルコでは、かつて英語教師だったシリア難民の方と知り合ったり、親しくなったクルド人の方と一緒にトルコ内でのクルド問題のテレビ番組を見るなど、遠い国のニュースとしてではなく現実に目の前で起きているできごととして世界に向き合う経験をしました。またドイツでは、ベルリンの壁とホロコーストの記憶を伝えるモニュメントや施設を調べて、ポーランドのアウシュヴィッツ＝ビルケナウ強制収容所に赴きました。そこでかつて収容された方の肩掛けのようなものが展示されている空間で、見学中の正装したユダヤの人々の中の 1 人からかすかに漏れた歌声を聞き、目の前で展示されている歴史と現在がダイレクトに結びついて強い求心力を放つような、逆ビッグバンの体験をしました。最後に訪れたグラスゴーでは、聖マンゴー宗教博物館というところで、さまざまな宗教が優劣の価

値観を伴わずに並列的に紹介されるという、それまで見たことになかった宗教の捉え方を目の当たりにしました。

また、この 2 ヶ月間は移動が多く、寝る場所にお金をかけられなかったこともあって、ほとんどドミトリーに宿泊しました。そこでは、様々な国や地域から来た人々と同じ部屋で眠りにつくという経験をしました。一時的であっても様々な文化を持った人々と生活の場を共にして交流したことは、貴重なできごとでした。

Q5) 落合さんの作品の中には、伝統的な祭りや信仰・儀式など、スピリチュアルな主題を扱う作品が少なからずあり、それが一種の魅力的な怖さというか、吸引力をもたらしているように感じるのですが、呪術的・宗教的なテーマに対しては、積極的に寄り添うようなアプローチを試みるのか、あるいはリサーチの対象として一定の距離を置くのか、どのようなスタンスでのぞんでいますか？

土着の儀礼と宗教とでは、向き合うスタンスが異なります。宗教に対しては研究対象として分析できるよう、フラットな姿勢で一定の距離を置いて向かい合うことを念頭に置いています。一方でリサーチでその土地固有のものを訪ねる際は、できるだけその土地に染まり、現地の人に親しむように心がけています。観光客的な表面上の交流ではなく、その土地の持つ哲学を 1 つ 1 つ紐解くことで根を下ろしたいという思いがベースにあります。ルーマニアでは、土着の風習とキリスト教的なものとの、切り離せずに混じり合っていることがよくあります。そういった合流の仕方や、土地の持つ時間の堆積を実感できることも興味深く感じます。つい抱きがちな「未開の地」を求めてその近代化に幻滅するという受け止め方に対しては、戒めの念を抱いています。

Q6) この 1 年近くの間、文字通り世界が閉ざされる中、住む地域・所得格差などによる分断が加速し、人種や宗教による差別の問題が根強く残っていることが暴かれました。多くの人が、いまの世の中に対し、「将来が現在よりもよくなるとは思えない」という漠然とした不安を抱いています。そのような私たちが受けることのできる「越境する祝福」とは、どのようなものになるのでしょうか？

まず、本展全体に対する「越境する祝福」というタイトルについて少しお話ししたいと思います。こちらは、出品作でもある《Blessing beyond the borders》の和名から名付けました。本展で特にメインとなっている《Blessing beyond the borders》とQ1でご紹介した《骨を、うめる》はどちらも2019年に発表し、「鎖国」と「国際結婚」という共通性があります。タイトルも展覧会の方向性も決まって、様々なことが本番へ向けて進んでいる最中にパンデミックが起これ、本展も開催時期が延期されることとなりました。そして現在、本展に向けて過去のできごととして向き合っていた「鎖国」が実質的に世界中で進行形の状態にあります。

今を生きている私たちは、一生に一度あるかどうかという未曾有のパンデミックの最中にいます。現在進行系の世界的な厳しい状況に対して、希望的観測かもしれませんが、この先COVID-19のワクチンが開発された時、世界中にいる人々が国やコミュニティー間に起こる摩擦や利害関係を超えて、同じ喜びを分かち合うことができる可能性があります。これもまた、生きているうちに一度あるかないかの特別なことだと思います。そしてそれは、「越境する祝福」の1つになりうるのではないのでしょうか。ただ、もちろん綺麗ごとだけではなく、既にワクチンを巡って富裕国による抱え込みの問題などが浮上しているのです。そういった分断を招くもの、壁を形成する動きは注視していく必要があると思います。

世界中で猛威をふるうCOVID-19それ自体は祝福にはなりませんが、見方によってはウィルスの蔓延がもたらしたある種の状況を祝福と受け止めることもできると思います。たとえば我々は、現代のものすごい速さで過ぎ去っていく情報や時間の流れの中で、たくさんのことを見落とししています。一種の空白状態の中で多くの人が、そうした身の回りのできごとへの気づきを得ることができたのではないのでしょうか。私の場合は、移動と人との接触が制限されてから近所の森を散歩する中で、時計よりもリアルに時の移ろいを感じさせる草花が描く風景の変化や、数メートルごとに次々と植物香りが変わっていく道、月の満ち欠けや、太陽の光を浴びた時の暖かさ、光が放つエネルギー、そういった遠い昔に置き忘れてきたような感覚を受け取ることに自分の身体が喜んでいて感じました。私たちには、奪われたものと与えられたものの両方があることを忘れてはならないでしょう。

また、パンデミック発生後に表面化した様々な問題の中で、アフリカ系の人たちに対する残虐な仕打ちへの怒りがBLMとして世界中に広がるなど、植民地時代からの負の遺産としての人種差別が、現在でも絶えていないことも

明らかとなりました。そのような中で、改めて立ち止まって考えるべき時が訪れています。

私は1年ほど前から霊長類学に関心を持ち、作品のテーマにも取り上げているのですが、霊長類学者の山極寿一氏が、ある興味深いことを指摘されていました。「人間は移動する存在である」一方で、「ゴリラは川を渡れません。泳げませんから。そうするとある場所でウィルスが暴発しても、川に囲まれた地域にとどまる。」だからこそゴリラはパンデミックを生き延びられるのだと。顔を合わせることで信頼を築いてきたのが人間であるならば、人類にとって移動とは本能的なものなのではないでしょうか。

地球規模の移動によって異なる文化の人と人がつながる。その結果生じる国際結婚には様々な側面があります。例えば2つ以上の祖国を持つ子供が生まれた場合、どちらの国で生きても、よそ者として扱われる場面が人生の中で何度も繰り返されるというケースもあります。私自身、研究を進める中で、友人関係や仕事上の組織としてのそれでは埋められない、生まれながらに無条件で「帰属できる場所」「仲間(共同体)として受け入れられること」を当たり前には得られないからこそ無意識に欲していることに気づきました。

国や民族という、自分が自由になりたいと思いつつも、求めてしまうその矛盾や葛藤、1つ1つの成り立ちの分析の中に、現代社会を分断している「壁」を越境していくためのヒントがあるのではないかと感じています。

世界各地で人々を隔てる強固な「壁」が露わとなっている現在ですが、今回展示する海の写真を貼りこんだ壁状の作品《Project: The backside over there》では、海の持つ人々の移動を「阻む」側面と、潮流や浜への打ち上げによって出逢うはずのなかったものを「つなぐ」という両面性を表しています。壁の前で写真を撮ると、実際に遠い土地の海辺で撮られた写真と同じ所に立っているように、空間的差異を越えてイメージ上でつながるような経験が生まれます。今はこのような状況ですが、世界各地の海辺でライフワークとしても展開していくシリーズです。

パンデミックはまだ収束していないので、動き続ける世界の状況を常に見つめながら、これまで取り組んできたことと、今起きていること、これから来るべき再構築された世界のことを思いながら、展覧会を編み進めています。

* NHK B1 スペシャル「コロナ新時代への提言～変容する人間・社会・倫理～」
(2020年5月28日 午後9:00～9:50) 内の山極寿一氏のコメントより。

「文明が始まる前から、人類という種は、信頼できる仲間を増やすように進化してきた。[中略] 人々が移動することによって、集団と集団との関係を密接に作ってきた。このためには、人が集まる、人が移動するということが条件になるわけですね。その、人が集まる、人が移動する中で、[中略] 国が作られ、国と国との連携が作られ、いま、グローバルな社会というのが地球上に出現したわけです。」

『ゴリラにパンデミックはあるのか?』

「実際人間よりうまくやり遂げているんですよ。というのは、ゴリラというのは熱帯雨林に生息し、熱帯雨林というのは網の目のように川が走っているわけですね。ゴリラは川を渡れません。泳げませんから。そうするとある場所でウィルスが暴発しても、川に囲まれた地域にとどまる。川を渡ればウィルスはその渡ったゴリラと一緒に他の地域に渡っていけるんですが、これが限界ですね。」

([] は引用者による。)

《スクリプカリウ落合安奈 プロフィール》

美術家。1992 年埼玉県生まれ。東京藝術大学油画専攻を首席、美術学部総代で卒業。同大学大学院グローバルアートプラクティス専攻修了。

現在は同大学大学院彫刻専攻博士課程に在籍しながら国内外で作品を発表。日本とルーマニアの2つの母国に根を下ろす方法の模索をきっかけに、「土地と人の結びつき」というテーマを持つ。国内外各地で土着の祭や民間信仰などの文化人類学的なフィールドワークを重ね、近年はその延長線として霊長類学の分野にも取り組みながら、インスタレーション、写真、映像、絵画などマルチメディアな作品を制作。「時間や距離、土地や民族を越えて物事が触れ合い、地続きになる瞬間」を紡ぐ。

【主な近年の展覧会】

- 2020 年 個展「Imagine opposite shore—対岸を想う」銀座蔦屋書店・GINZA SIX／東京
- 2019 年 個展「骨を、うめる／one's final home」nap gallery／東京
- 2019 年 個展「mirrors」Bambinart Gallery／東京
- 2019 年 「Bridge」ホイアン（世界遺産）／ベトナム
- 2019 年 都美セレクショングループ展「星座を想像するように—過去、現在、未来」東京都美術館／東京
- 2018 年 「Ascending Art Annual Vol.2 まつり、まつる」SPIRAL／東京・京都巡回